

# わたくしより優れた方

日本基督教団  
塚口教会  
〒661-0012  
尼崎市南塚口町  
2丁目34-3  
電話 06-6429-3019

## わたしより優れた方

ルカによる福音書三章七―二〇節  
沖村裕史

荒野で神によって召し出されたヨハネが、一八節、「民衆に福音を告げ知らせ」ます。七節で、「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」と語り始めるヨハネの言葉は、とても厳しく、一読すると、とても、福音―神からの喜ばしい知らせとは言えない、むしろ神の怒り、神の裁きだけが語られているように思えるものです。しかし、ここで語られているのは、神の怒り、神の裁きそのものよりも、それから免れることの出来る者など誰一人としていない、ということなのです。

ヨハネは、旧約の預言者たちと同じように、その激しい言葉によって、神だけが義であり、であればこそ神だけが裁きと救いをもたらすことのできるお方であること、人々にはつきりと思ひ起こさせようとしています。その神の裁きと救いが、神の民であるユダヤ人だけでなく異邦人にも、罪人だけでなく正しいと思っている人にも、すべての人々に向けられている、開かれていられることを伝え、だからこそ、すべての人が神を見失い、神に背を向けることなく、神を畏れ、神に立ち返り、「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」ように、と強く勧めます。ヨハネの言葉が激しさを増すのは、神の裁きと救いのその時が差し迫っている

ことを知っていたからです。ヨハネは、救い主キリストの到来によって、その時が今ここにもたらされようとしている、だから悔い改めて新しく生き直すように、と力を込めて教えるのです。これが、「悔い改めの洗礼」を通して伝えていた、ヨハネの福音でした。

今も、わたしたちに求められているのは、悔い改めです。わたしたちの誰も、罪を見つめようとしません。「確かに悪いところもあるけれども」ととびやめます。「悔い改めを迫る必要はない」ということです。その根本にあるのは、自分の罪を認め、心の向きを変えることなどしなくても、今の自分のままで救いにあずかることができる、そういう思いです。そればかりか、自分のことは棚に上げて、他人のことを裁きます。

そのことによって、踏みこたえられるのは神の義―神から与えられた「いのち」の尊さ、何よりも貧しく、弱くされている者の「いのちの尊厳」です。

ヨハネのこの福音を聞いた「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていました(二五節)。神が人々の悔い改めを待ち続けてくださったとき、人々もまた救いの訪れを心から待ち望んでいました。

ヨハネが生きた時代のユダヤは、ローマの支配下にあつて、一九節から二〇節に記される領主ヘロデのようなごく一部の人々を除いて、多くの人々が混乱、疲弊、憔悴、

そして絶望のただ中を生きているような時代でした。圧倒的な軍事力によって支配されることの悲惨さは、言葉にならないほどのものです。ルカがここに、徴税人や兵士のことを書き記しているのは、偶然でも、気まぐれでもありません。彼らはまさに、圧倒的な軍事力を持つて支配し、不正と略奪を行うローマ帝国の悪の、目に見える、具体的で、象徴的な存在でした。一二節から一四節に記される、ヨハネと彼らとのやり取りは、平穩無事な生活の中での、倫理的な勧めというのではありません。それは、人々のいのちの尊厳が守られるかどうか、つまり、神の義が打ち立てられるかどうか、そのことが厳しく問われ、求められる言葉でした。

そのような時に、ヨハネのような特別な力を示す人が現れれば当然、この人こそと思ひ、期待をします。ところが、その問いにヨハネははつきりと答えます。わたしではない。そうはつきりと告げます。しかし、絶望の思いからそう言うのではありません。わたしのすぐ後に来られる方がおられる。その方は、わたしよりもずっと力がある。「わたしは、その方の履物のひもを解く」というのは、その方の履物のひもを解く「ひもを解く」というのは、奴隷の仕事です。ヨハネは、その方にとつて自分は奴隷としてお仕えする値打ちもない、しかし、その資格もない自分がそれでも仕えることを許し、わたしたちが待ち望んでいた救いをもたらしてくださる方が来られる、そう語ります。これこそ、ヨハネの告げる福音、神からの恵みの知らせでした。

そしてヨハネは、真の救い主による救いなどのようなもののかを教えます。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、

脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる」(一六―一七節)。まことの救い主がもたらす救いは、聖霊と火による洗礼としてもたらされる。それは、人間のどのような力や行いも、思いや富をも越えて、ただただ、圧倒的な力をもつてもたらされる、ヨハネはそう告げます。ヨハネが言った「わたしよりも力ある方」とは、イエスのことです。とすれば、イエスによる洗礼は、「聖霊と火による洗礼」であり、それは水による洗礼のように甘っちょろいものではなく、もつと厳しく激しい裁きの洗礼だ、ということになります。

わたしたちは、イエスは、どんなに弱くても、どんなに罪深いものであつても受け入れてくださる方で、愛の救いをもたらしてくださった方であつて、裁くなどということとはなさらない、と思ふかも知れません。ヨハネは、イエスのことを誤解しているのではないか、そう思われるかも知れません。しかし、ここで言われていることは紛れもなく、イエスは裁きのために来られたのだということなのです。

大切なことは、聖霊と火による洗礼を受ける、とはどういうことか。それは、古い人に死に、新しい人に甦るといふことだ、ということなのです。イエスと共に死に、イエスと共に甦る、ということなのです。死ぬのは誰か。古い人です。欲望のままに生きて、自分の成し遂げたこと、自分の持っているものの多少にとらわれて、時に絶望して嘆き、時に頑なになつて人を切り捨てる、そんなわたしたちのことです。罪の人です。そしてそんな裁かれるべきわたしたちが焼き尽くされて、新しく甦る。それこそが、まことの救いなのです。

(二〇一七年七月九日、三位一体後第四主日礼拝)